

祇園祭は どのようにして続いてきたのか？

5 班メンバー

後鳥 友里 (京都大学農学部 2 回生) 宮島 麻衣子 (株式会社 高島屋宣伝部 京都店販促室) 三好 理絵 (京都大学法学部 1 回生)
岡本 智博 (京都造形芸術大学 企画広報課) 桂 美月 (京都大学大学院工学研究科修士課程 1 回生)

テーマの背景・目的

869 年に始まったとされる祇園祭は 2019 年は創始 1150 年になる節目の年である。千年以上時代と共に変化しながら続いてきた祇園祭には、SDGs について考えるにあたり、学ぶべきことが多くあると考えた。そこで我々 5 班は「祇園祭はどのようにして続いてきたのか」をテーマとし文献調査、アンケート調査を行った。



↑ 議論するメンバー

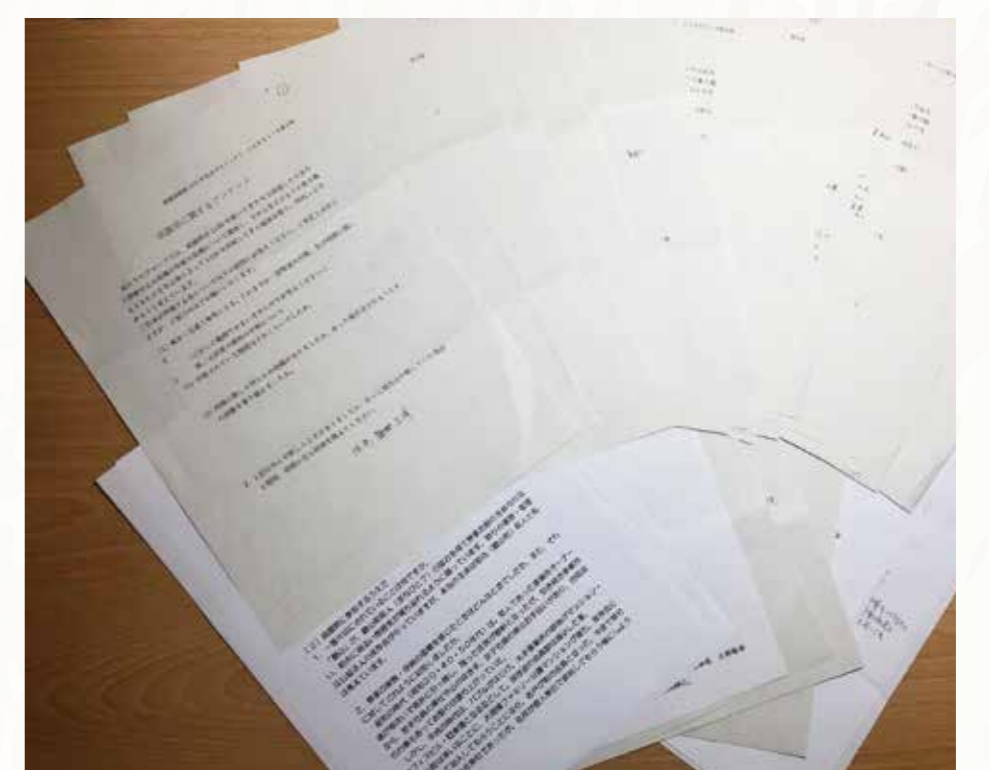
調査方法・内容・結果

当班では文献調査、アンケート調査、インタビューを行った。

文献による調査結果から分かった事は、一言で「1150 年続いてきた」と言っても、ずっと同じ形で続けてきたという事ではなく、時代やその年の背景に合わせて形を変えながらも「続けるんだ」という町民の心意気、熱意によって守り続けられているということである。

各山鉾保存会と山鉾巡行に関わる機関全 22 団体にアンケートに答えていただいたところ、現状の課題として人手・後継者不足が 11 件と最も多く挙げられた。また巡行が祭事ではなく商業イベントになってしまうことを懸念する回答もあった。町内が結束して神事である祭事を行うという、いわば伝統をこれからも続けていこうとする心が祇園祭に参加する上で大切にしていることだという答えが多かった。

鯉山、郭巨山の両保存会には直接インタビューする機会をいただいた。祭の運営形式や鉾の修復保存など時代に合わせて考えるべき点を多く語ってくださった。最前線で祇園祭に携わる保存会の方々の生の声は、課題等は確かにあるものの決して悲観的ではなく、前向きに取り組む姿勢と熱意だった。その原動力は 1150 年の歴史の一旦を担っているという責任と充実感、そして自身と家族を守り、育ててきた地域と祭に対する感謝と信心なのだということが印象に残っている。



↑ 頂いたアンケートの数々



← 祇園祭関係者アンケート
一覧はこちらから！



考察・提言

我々は、調査の結果から、祇園祭がここまで 1150 年も続いてきた理由を以下のように考えた。

- 1、時代の流れの中で起こった社会の変化に祭が対応してきたこと
- 2、町衆を含む祭の担い手の強い熱意があったこと
- 3、都の災厄を鎮めるといふ祭の元々の主旨に、人々の平和に暮らし続けたいという普遍的な願いが重なっていること

今の世界を持続させ幸せに暮らし続けるために、みんなが当事者意識を持って取り組むこと。これは SDGs の推進を目指すに当たり、生かすべき重要な点なのではないか。ここでの学びを、これからの我々の行動に変えていきたい。



↑ インタビューの様子

調査を終えて

今回の調査を通して、今まで私の中で観光行事でしかなかった祇園祭がもっと深いものになりました。この企画の中で得た繋がりや学んだことを様々な人に知ってもらいたいし、これからに生かしていきたいと思いました。(後鳥)

祇園祭 1150 年の歴史は、様々な意見を持つ人々の団結があったからこそであると感じました。イベントの祭りとは違う、祇園祭の歴史や考え方について、一府民として誇りに思うと同時に、より多くの人に知ってもらえたらと思います。(桂)

祇園祭を歴史から紐解き、保存会の方々のリアルなお話を伺えたことで来年の祭が楽しみになりました。京都に職場を持つ身としては、今回経験したことを周囲の友人・知人と共有し、理解を深めたいと思います。(宮島)

調査結果として、「一人一人の当事者意識の強さ」が 1150 年持続してきた秘訣なら、いくら義務にしても政策にしても 2030 までの SDGs の達成は難しいだろうと思った。一方で、こんなにも身近で行われている祇園祭について何も知らず灯台下暗しだった。SDGs と祇園祭を結びつける事は研究テーマとして非常に興味深かった。他にもこういう切り口で SDGs について学ぶ事ができそうだった。(岡本)

アンケート調査とインタビューを通じて山鉾町の方々が巡行を神事ととらえて誇りを持って参加し、その誇りが祇園祭が続いてきた原動力なのだろうと強く感じました。以前は祇園祭をイベントと見ていましたがその見方が変わりました。(三好)